

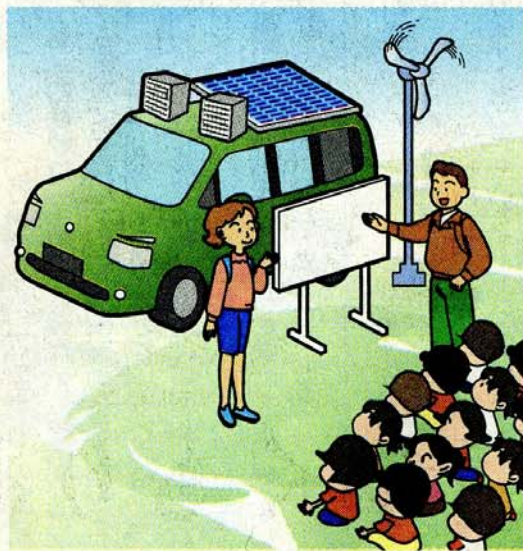
「環境カー」出発進行

学校や企業で学習会

県08年度導入 移動中も意識啓発

県は二〇〇八年度から、県内各地に向けて県民の環境学習を手助けする「環境カー」を導入する。日常生活が環境に与える影響を学べる実験教材やデータを搭載し、学校や企業、各種イベントに乗り込む。「動く広告塔」として移動中も環境問題に関する意識啓発を行う。県は十八日から愛称を募集している。

愛称を募集



環境カーは、低燃費で教材を積むことができ、山間部へも移動できるトヨタのVOXY(ウオクシー)を選んだ。車体は環境をイメージし緑色に塗る。屋外スピーカーから環境対策を呼び掛けながら、イベント会場などへと移動する。

教材は▽水、大気の保全▽ごみの減量▽省エネルギー▽新エネルギーなど八項目を用意。小学生から大人までを対象に県民が環境について考え、行動するよう促す学習プログラムをそれぞれ考案した。

ごみの減量がテーマの場合、環境学習の参加者は家庭ごみが環境に与える影響について実験などを通して理解を深め、マイバッグなど自分にできる対策を考える。チェックシートに目標を記入し、行動に移す。学習を通して、エコライフの実践を促す狙いがある。

県環境生活企画室によると環境カーは高知県、群馬県、和歌山県などで導入されているが、学習プログラムと一体化するのは全国でも珍しいという。

排出量について、二〇〇〇年までに基準年(一九九〇年)比8%減を目指している。国よりも2%高い削減目標を掲げ、県民一人一人の意識改革が欠かせない。

県環境生活企画室の菅原伸夫企画担当課長は「県民運動を巻き起こす原動力になるよう期待している。一人一人が具体的な行動を起こしてほしい」と呼び掛ける。

環境カーの愛称は、覚えやすく親しみやすいものを二月十七日まで募り、選ばれると車体に記載される。

問い合わせは同企画室(019・629・5329)へ。

レバノン紛争対処に学ぶ

盛村上前大使(元県警)が講演

アジア刑政財団岩手支店(宮沢啓祐会長)主催して講演した。内市場が狭まってくる。

〇六年の「レバノン紛争」を紹介。「在留邦人の安全確保と、日本への正確な情報伝達が重要だった。危機管理の上では、常に最悪の事態を想定して対処することが必要

